

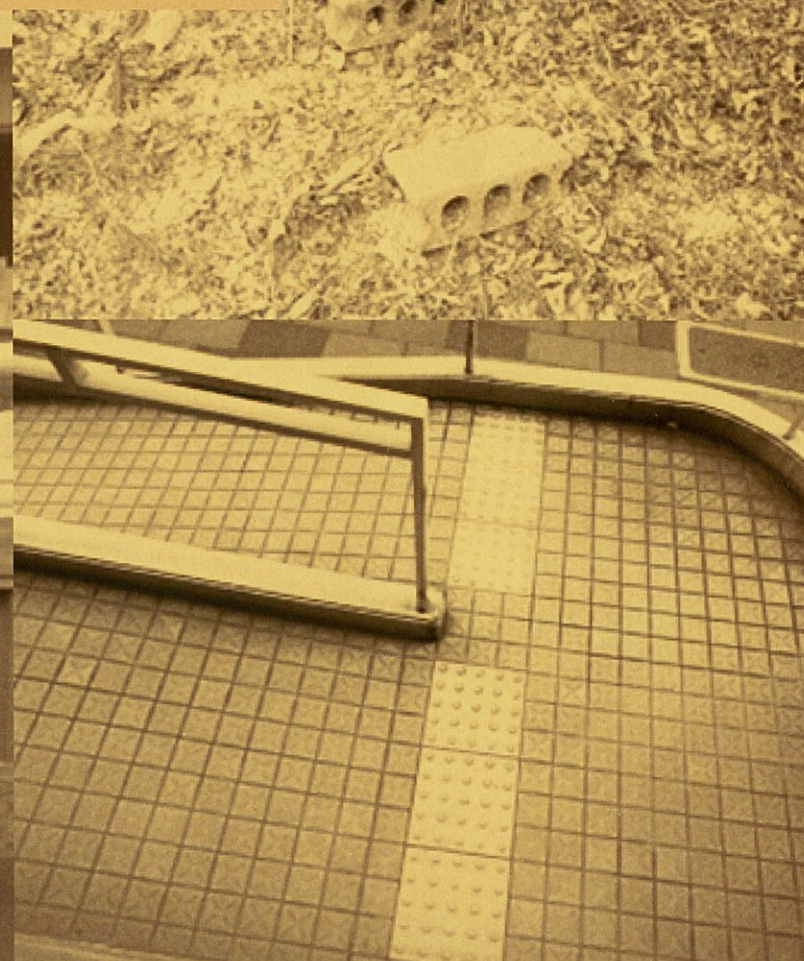
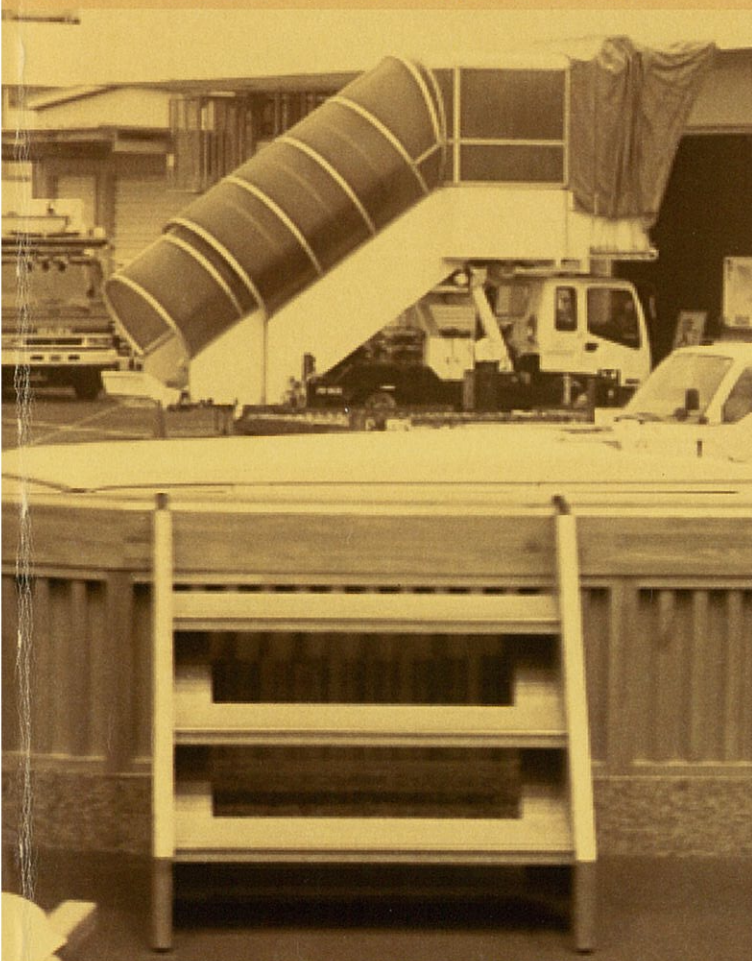
March 31, 2010

ISSN 1883-0595



人工物発達研究

第2巻第2号 (通巻第3号)



人工物発達研究

第2巻第2号（通巻第3号）

2010年3月

総合研究大学院大学文化科学研究科

黒須正明（編）

目次

はじめに	1
著者紹介	3
新規論文	
Cultural Diversity and Value Criteria in ICT-related Behavior - A View from the Artifact Development Analysis -	
Masaaki Kurosu	5
人工物発達からみたカナダ・イヌイット社会の歴史的変化に関する研究ノート	
岸上伸啓	19
ヨーロッパ文化のロジックを探る	
安西洋之	24
儀礼の変化と保存をめぐる人工物発達学からの考察 - 石垣島川平の事例 -	
澤井真代	32
ヨーグルト食文化にかかわる情報伝達手段の人工物発達学的調査	
マリア・ヨトヴァ	42
芸文書房及びその出版物に関する人工物発達学的研究	
梅定娥	64
人工物発達学的視点からみた韓国のチャジャンミョンをめぐる記憶と意味	
金桂淵	69
携帯電話の利用からみた高齢者の社会関係	
橋爪絢子、黒須正明、山中敏正	79
既刊論文	
The Mechanism of Satisfaction (WWCS 2009)	
Masaaki Kurosu	86
Culture and Communication Behavior - A Research Based on the Artifact Development Analysis - (HCI International 2009)	
Masaaki Kurosu and Ayako Hashizume	92
Position Paper for "Culture and Technologies for Social Interaction Workshop" at INTERACT 2009 (INTERACT 2009)	
Ayako Hashizume, Masaaki Kurosu and Toshimasa Yamanaka	100
人工物発達学にもとづいた新たな人工物の開発 (1)購入時と利用時の価値基準 (ヒューマンインタフェースシンポジウム 2009)	
黒須正明、橋爪絢子	104
文化の多様性と情報通信行動 (ヒューマンインタフェースシンポジウム 2009)	
橋爪絢子、黒須正明、山中敏正	112
高齢者における携帯電話の利用の地域差 (モバイル学会シンポジウム 2009)	
橋爪絢子、黒須正明、山中敏正	118
Regional Difference in the Use of Cell Phone and Other Communication Media among Senior Users (HCI International 2009)	
Ayako Hashizume, Masaaki Kurosu and Toshimasa Yamanaka	122
Regional Difference in Problems during the Use of the Cell Phone by Senior Users (IEEE SCE 2009)	
Ayako Hashizume, Masaaki Kurosu and Toshimasa Yamanaka	132
Applying the Artifact Development Analysis to the Optimal Development of Means for Learning (CATE 2009)	

Masaaki Kurosu	135
Usability and Culture as Two of the Value Criteria for Evaluating the Artifact - A New Perspective from the Artifact Development Analysis (ADA) - (Human Work Interaction Design 2009)	
Masaaki Kurosu	143
学習者特性と利用状況に適合した学習手段の選択 - 人工物発達学の視点から - (放送大学研究年報)	
黒須正明	153
情報社会における高齢者のコミュニケーション - 感性コミュニケーションとメディア利用 - (日本感性工学会 感性フォーラム札幌 2010)	
橋爪絢子、黒須正明、山中敏正、椎塚久雄	161

はじめに

関係者の皆様のご協力のおかげで、人工物発達研究も通巻第三号を刊行することができるに至った。これまで書いてきたように、この研究プロジェクトは、総合研究大学院大学の葉山高等研究センタープロジェクトのひとつとして実施してきたが、その助成は3年間ということで、2010年3月にひとまず完了する。それまで、関係教員、学生さん、そして事務の方々のご支援があったおかげで、3年間でようやく研究領域としてそれなりの輪郭を形作ることができた。改めて謝意を表したい。

人工物発達学というアプローチは、精力的にアピールしてきたおかげか、徐々に総研大関係者以外の皆さんの耳にも届くようになった。本号に寄稿してくださったミラノ在住の安西さんもその一人である。また前号から寄稿してくれていた筑波大学の橋爪さんもそうである。そのほかにも、マーケティング関係、ユーザビリティ関係、デザイン関係など、特に応用分野の皆さんが関心を示してくれるようになった。人工物発達学は、これまで工学的かつ応用的であった私としては、研究態度を科学的かつ基礎的な方向に転回したもので、昔、大学院で心理学という科学の一領域を研究していた頃の自分の姿勢を多少懐かしく思い出しながら、活動を続けてきた。しかし元は心理学に対して心工学を打ち立てたいと大学院時代の指導教授に話しをした自分であり、工学的指向性の強い自分である。そろそろ工学的な応用へも取り組んでゆきたいと思っている。

そのひとつが、近年マーケティング領域で話題になっているビジネスエスノグラフィと同期した、設計の上流工程への適用である。ビジネスエスノグラフィについては、なぜエスノロジーでもアンソロポロジーでもなく、エスノグラフィという用語を使っているのかという素朴な疑問にはじまり、その方法論の脆弱さについても危惧するところが大きい。マーケティングの分野では、新たなキーワードが渴望され、人々がすぐにそれに飛びついて、しばしば安易な適用を生み出してしまう傾向がある。共分散構造分析(SEM)という手法に対する近年の流行に、その典型を見ることができる。これに対し、人工物発達学は、ユーザの特性や利用状況に適合した人工物はどうか、という方向性をきちんとした調査分析によって示そうとするものであり、更に方法を整備すれば、どのような人工物を作るべきか、という具体的な提案につなげてゆくことができると考えている。

もちろん科学としての側面では、進化生物学との類似性にもとづく概念の転用の可能性、進化と発達という概念の違いに関する考察がありうるし、また人々が人工物を選択する際の基準としての合理性に関する哲学的考察も新たな展開を生み出すだろう。特に合理性という概念は、任意の理に関する公理系に人間の判断や行動が適合しているかどうか、ということであり、一見、非合理的と見える行動についても特に注目していきたい。

判断や行動の合理性にかかわる公理系としては、幾つか異なるものがこの世の中に共存している。ひとつの考え方ではあるが、それなりの理にかなった選択であれば、合理的といえることができるだろう。そのとき、人々の間に同時に複数の公理系がある場合、どの場面でどの公理系を採用するかについての公理系の選択行動というものは興味深いものである。いいかえれば、複数の公理系に対するメタ公理があるような気もする。そのあたりが人工物選択における基準系としての全体的な姿であろうと考えている。

私自身の原稿としては、まだ書きたいものが残っている。人工物発達学におけるフィールドワーク手法という内容については、すでに途中まで書きかけている。ただ、年度内刊行という財務上の事情もあり、その原稿については通巻第四号に回すことにした。

今後、総合研究大学院大学の助成が取れるかどうかは未定である。そうした場合には、その他の助成を得ることによって研究と本誌の刊行は継続してゆくことになる。ちなみに今年度は放送大学学園からの助成金も一部使わせていただいている。いずれにせよ、本誌は所謂三号雑誌にならぬよう、積極的に活動を継続していくつもりである。またプロジェクトは一旦解散ということになるが、改めて四月からは新たな組織化を図ることとし、本誌への寄稿については、より広い範囲から求めてゆくことにもなる。

もちろん執筆依頼なしの投稿も歓迎する。事務的なことだが、その際には、ヒューマンインタフェース学会の論文のフォーマット(<http://www.his.gr.jp/download/index.html>)にある「原稿執筆の手引き&原稿テンプレート」をご利用いただきたい。

関係諸氏の今後のご支援ご協力に強く期待するものである。

2010年2月21日

総合研究大学院大学 学長特別補佐、教授
放送大学 教授
黒須正明

著者紹介

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）

早稲田大学第一文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了、マッギル大学人類学部博士課程単位取得退学。博士(文学) (総研大)。早稲田大学文学部助手、北海道教育大学助教授、国立民族学博物館助教授などをへて、2005 年より国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授。専門は文化人類学で、カナダ極北地域やアラスカにおける先住民の生業システム、社会変化、海洋資源の利用と管理、開発問題、都市在住イヌイットの生活などを研究してきた。主な単著として『極北の民 カナダ・イヌイット』(1998 年、弘文堂)、『イヌイット』(2005 年、中公新書)、『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』(2007 年、世界思想社)がある。編著書には Indigenous Use and Management of Marine Resources (SES NO.57, 2005, National Museum of Ethnology) や『海洋資源の流通と管理の人類学』(2008 年、明石書店)などがある。また、国際的に評価された論文として“A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples” Journal of Anthropological Research 60: 341-358 (2004 September)などがある。

安西洋之（あんざい ひろゆき）

1983 年上智大学文学部フランス文学科卒業、いすゞ自動車株式会社においてヨーロッパ自動車メーカー向けコンポーネント供給プロジェクトに従事。1990 年より現在に至るまでイタリア在住。トリノのビジネスコンサルタント会社を経て独立。1995 年よりミラノ。2000 年、モバイルクルーズ株式会社を設立し代表取締役。ビジネスプランナーとして、自動車、建築、インテリア製品、工業デザイン、電子部品、ユーザーインターフェース、食品など多岐に渡る分野でプロジェクト立案と実行を手がけてきた。2008 年より、日本におけるヨーロッパ文化の理解普及を目的とするプロジェクト「ヨーロッパ文化部」をスタートさせ講演会や勉強会を主宰。著書に『ヨーロッパの目 日本の目 ー文化のリアリティを読み解く』(日本評論社)がある。ブログは「ヨーロッパ文化部ノート」(<http://european-culture-note.blogspot.com/>) 及び「さまざまなデザイナーヨーロッパの目」(<http://milano.metrocs.jp/>) を定期的に行っている。

黒須正明（くろす まさあき）

1978 年早稲田大学文学研究科(博士課程心理学専修) 単位取得満期退学、日立製作所に入社し、中央研究所でソフトウェアシステムの研究開発に従事。1988 年同社デザイン研究所に移りユーザビリティ工学やインタラクションデザインの研究に従事。1996 年に静岡大学情報学部情報科学科教授として赴任し、ユーザ工学の体系化を行う。2001 年文部科学省メディア教育開発センター(その後、独立行政法人)教授として赴任。現在は、学校法人放送大学教授、および国立大学法人総合研究大学院大学学長特別補佐、教授。ユーザ工学の中でも特に長期的ユーザビリティや人工物ライフサイクルや感性を含めた満足感の構造などに興味をもち、またユーザ工学の発展的応用として人工物発達学を提唱している。学会活動として、APCHI98 大会委員長、IFIPTC13 委員会日本委員、JIS TC159/SC4/WG6 主査、ヒューマンインタフェース学会国際担当理事、INTERACT2001 大会長、ICHCI2009 大会長などを歴任。現在は NPO 人間中心設計推進機構の理事長などをつとめている。著訳書に「認知的インタフェース」「ヒューマンインタフェース」「ユーザ工学入門」「IS013407 がわかる本」「ユーザビリティテスト」「ペーパープロトタイプ」「ユーザビリティハンドブック」など。

山中敏正（やまなか としまさ）

1982 年千葉大学大学院工学研究科修士課程工業意匠学専攻修了。博士(感性科学)。イリノイ工科大学特別研究員、旭光学工業デザイン研究員、デルフト工科大学特別研究員を経て、2005 年から筑波大学大学院人間総合科学研究科教授。日本デザイン学会理事、日本感性工学会副会長。日本認知科学会、日本人間工学会会員。

澤井真代（さわい まよ）

2002 年 早稲田大学大学院文学研究科考古学・文化人類学専攻修士課程修了。出版社勤務を経て、現在総合研究大学院大学(国立歴史民俗博物館)文化科学研究科博士課程在学。文化人類学、民俗学を専攻し、言語学を学びながら、琉球諸島、とくに八重山諸島の儀礼と口承伝承について調査研究を続けている。

マリア・ヨトヴァ（ヨトヴァ マリア）

2006 年ブルガリアのソフィア技術大学院修士課程経済研究科単位取得退学。2004～2006 年 JICA カザンラク地域活性化プロジェクトに携わり、通訳・広報の仕事を経て、現在、総合研究大学院大学（国立民族学博物館）博士課程文化科学研究科大学院生。ヨーグルト食文化に関する経営人類学的研究に従事。

梅定娥（めい ていが）

2006 年佐賀大学大学院教育学研究科で修士課程を終了して、現在総合研究大学院大学博士後期課程在学している。2009 年に博士論文を提出して、2010 年 3 月終了予定。修士時代から中日比較文化を課題に取り組んできたが、博士論文は「満洲国」の文壇の中心を据えていた文化人古丁を取りあげ、彼の創作、翻訳、出版活動を徹底的に調べ、当時「満洲国」の文化政策、及びそれに対する人々（中国人、日本人）の反応とリアクションを考察した。

金桂淵（きむ げーよん）

韓国慶北大学考古人類学科卒業、慶北大学大学院考古人類学科修士課程修了。2005 年、韓国国立民俗博物館研究員を経て、現在総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士課程在学中。韓国華僑に対する文化人類学的研究に従事し、華僑の生存とそれをめぐるネットワークづくりなどを研究している。主な論文としては「韓国社会の韓国華僑に対する差別に関する歴史的考察」（共著、『京都創成大学紀要』7:141－175、2007）、「Personal Identification of Chinese Residents under the Changing Laws in Korea” in the Culture and Anthropology in the Age of Super-Competition (The Korean Society for Cultural Anthropology, pp.244－249, 2008)などがある。

橋爪絢子（はしづめ あやこ）

2006 年法政大学文学部卒業。早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程を経て、現在、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程に在学中。心理学、人間科学、感性情報学を専攻し、ユーザビリティを学びながら、情報通信機器の利活用とユーザ特性の関連について、特に高齢者を対象とした調査研究に従事。

人工物発達研究 第2巻 第2号 (通巻第3号)

2010.03.31

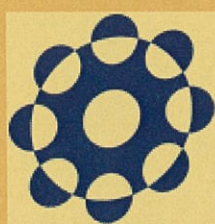
発行所 総合研究大学院大学 文化科学研究科 メディア社会文化専攻

発行人 黒須正明

〒261-8586 千葉県千葉市美浜区若葉 2-11 放送大学 ICT 教育センター内

電話 03-3984-7703 FAX 03-3984-7703

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 2-3-1-307 (黒須自宅)



国立大学法人

総合研究大学院大学

The Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI)

人工物発達研究

第2巻第2号(通巻第3号)

ISSN 1883-0595

2010年3月31日刊行

編集 黒須正明